

サパティスタ22年の歩み

柴田 修子

はじめに

メキシコ南部チアパス州で先住民組織、サパティスタ民族解放軍 (Ejército Zapatista de Liberación Nacional: EZLN) が武装蜂起して22年が経過した。当初の熱狂的な勢いはなく、もはや国内でも忘れられつつある。パラメトリカ社が2013年12月に行ったアンケート調査によれば、サパティスタ民族解放軍を知っている人は66%、そのうち48%が同軍をものはや過去の運動と答えた。その一方で、サパティスタ自治区での「抵抗生活」はいまもなお続いている。カステジャノスによれば、25万人が自治区で生活しているという [El Universal, 2 de enero, 2014]。

サパティスタ民族解放軍は1994年1月1日、チアパス州の貧困を訴えて武装蜂起した集団である。とはいえ武器を手にしたのは2日間のみで、その後はインターネットを通じてメッセージを発信し、世界の共感を得ることで政府に対抗してきた。そのため「インターネットを駆使した社会運動の先駆け」といわれている。筆者のサパティスタとの出会いは、1996年、世界中の人を招いて「大陸間会議」を開くという呼びかけに興味を持ち、参加したことから始まる。そのときは面白い経験をしたという程度であった。

この問題に関心を持つようになったのは、1999年に再訪したときからである。このときは、人権侵害の有無を監視する国際オブザーバーとして、

サパティスタの村に滞在した。「低強度戦争」と呼ばれる政府軍の嫌がらせが最高潮に達していた時期であり、毎日村を通過する政府軍の示威行動を記録して過ごした。村と都市を結ぶ交通手段は整備されておらず、都市に向かうトラックに乗せてもらい、筆者は無事に戻った。しかし、2日後に戻ったオブザーバーは途中で車を止められ、反サパティスタ派の人々から暴力を受けた。筆者はその数日後、サン・アンドレス村で移動入管車に捕まり、ツーリストビザを没収された。翌日入管に出頭し2時間以上尋問を受けたうえ、その後度重なる出頭でもツーリストビザを再発行してもらうことができなかった。結局、メキシコシティの移民局で再発行してもらい、無事出国することができたのだが、そのときの不安はいまも忘れられない。帰国したら二度とこの問題に首を突っ込むまいと思ったのだが、帰国して冷静になってみると、国際社会の目がないとチアパスの村々は戦車に蹂躪されて終わるかもしれないと不安を覚えるようになった。

幸い関西には、1996年の国際集会に参加したメンバーを中心にサパティスタの動きを注視する勉強会があり、メキシコを訪れたメンバーの報告を聞きながら現地の動向を学ぶことができた。筆者は、さまざまな人の目でみてほしいという思いから、国際オブザーバー希望者のために推薦状を書いてきた。筆者自身も2001、2003、2009、

2013～14年と訪れ、運動の変遷を可能なかぎりみてきた。常に中立的な立場を心がけたつもりである。しかし、村に行けば中立的ではいられないジレンマもあった。そして知れば知るほどわからないことが多く、「サパティスタ運動とは一体何なのか」という問いに、いまだ答えを出せずにいる。本稿では、運動の流れ、批判点をまとめながら、「わかりにくさ」の理解に努めたい。

1 これまでの流れ

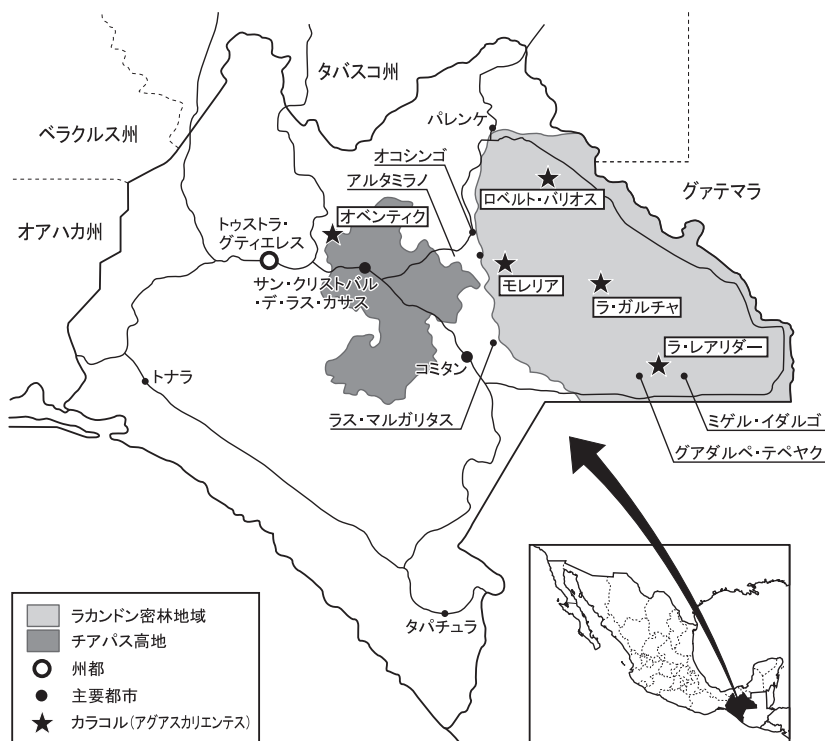
サパティスタ運動のわかりにくさの理由の一つに、よくいえば柔軟、悪くいえば場当たり的な運動のあり方がある。彼らのスローガンの一つ

に「問いかけながら進む」というものがある。問題が起きたら立ち止まり、その都度方向性を定め直すというような意味である。その言葉どおり、サパティスタ運動は、必要に応じて運動のあり方や争点を変えながら今日に至っている。ここでは(1)対政府、(2)対市民社会、(3)内部の動き、に分けて、これまでの運動の流れを概観したい。

(1) 対政府

1994年1月1日、サパティスタ民族解放軍と名乗る先住民集団が、チアパス州随一の観光都市として知られるサン・クリストバル・デ・ラス・カサスをはじめ7つの都市を占拠した。「ラカンドン密林宣言」を発表し、自分たちが「500年におよぶ闘

図1 チアパス州地図



(出所) Comisión Nacional para el Desarrollo de los Pueblos Indígenas, Centro de Documentación sobre Zapatismo を参考に小林貴徳氏作成。

いから生まれた」者であり、メキシコに自由・正義が保障される民主的な社会空間を取り戻すために立ち上がったとして、政府軍に戦争を宣言した。政府軍は直ちに応戦したが、政府軍の攻撃に反対するデモがメキシコ各地で起こり、サリナス大統領 (Carlos Salinas de Gortari) は1月12日、政府軍の停戦を宣言した。政府人権委員会の発表によれば、戦闘で153人が死亡したという⁽¹⁾。

メキシコでサパティスタに同情的な世論が作られた理由は2つ考えられる。一つには70年以上に及ぶ制度的革命党 (Partido Revolucionario Institucional: PRI) による事実上の単独独裁体制のなか、政治腐敗に不満を抱いていたメキシコ人にとって、彼らの訴えが一定の説得力を持って受け入れられたことがある。もう一つには、明らかに劣った武器で武装した先住民を空爆する政府軍は、弱者をいじめる権力者として国民の目に映ったことだろう。実際サパティスタの武器は貧弱で、兵士の数も3000人程度だったといわれている。政府軍は1万2000人を動員しており、軍事制圧を行うことは十分可能だったと、当時外務大臣で後に和平交渉にあたったマヌエル・カマチョは述べている [Gil 2013, 10-11]。一方、政府が停戦に踏み切った理由は、国内の反発が強く支持率が急落したこともあるが、米国・カナダ・メキシコの3カ国で締結された北米自由貿易協定への影響を恐れ、メキシコの紛争を懸念する米国に配慮したためともされている。

2月にサムエル・ルイス司教 (Samuel Ruiz García) を代表とする国民仲裁委員会 (Comisión Nacional de Intermediación: CONAI) の仲介のもと、サパティスタと政府との交渉が始まったが、当時は状況が混乱しており、話し合いは進展しなかった。8月に政権を継いだセディージョ新大統領 (Ernesto Zedillo) は、1995年2月9日にマルコ

ス副司令官 (Subcomandante Marcos) の本名・経歴を発表し、自治区への軍事攻撃を行った⁽²⁾。マルコスの逮捕とサパティスタ殲滅を目指したが失敗し、再び対話路線に転じた。交渉再開のため、3月6日「チアパスにおける対話、和解および尊厳ある平和のための法律」を可決させ、政府側の代表団として和平調停委員会 (Comisión de Concordia y Pacificación: COCOPA) を設立した。これを受けてサパティスタ側も交渉に応じ、先住民の権利と文化、民主主義と正義、福祉と開発、チアパス社会の諸セクター仲裁、女性の権利、対立の停止という6つのテーマに関して話し合いが行われることになった。このうち先住民の権利と文化についてのみ合意に達し、1996年2月「先住民の権利と文化に関する合意」(サン・アンドレス合意) が結ばれた。この合意では、チアパス州における改革のほか、先住民自治に関する憲法改正が行われることが約束された。その後、先住民法案をめぐる、和平調停委員会とサパティスタ側の交渉が続いていく。

2000年の大統領選挙では、国民行動党 (Partido Acción Nacional: PAN) のビセンテ・フォックス (Vicente Fox) が与党PRIを破り、71年ぶりの政権交代が実現した。12月に就任したフォックス



ラ・レアリダー村にてマルコス副司令官 (筆者撮影)。

大統領は、サパティスタ問題を15分で解決すると公約し、先住民法案採択に意欲を示した。これを受けてサパティスタは、24名の代表団をメキシコシティに送ることを発表した。2月に入り「大地の色の行進」と銘打って蜂起以後初めてチアパス州を出た司令官たちは、メキシコ各地で集会を行った後首都に到着し、国会で演説するなど憲法改正に向けたデモンストレーションを行った。ところが4月に可決した法案は、法案の核であったはずの先住民の自治権や領有権などが削除され、サン・アンドレス合意以後積み重ねられてきた議論がまったく盛り込まれない形骸化した内容となっていた⁽³⁾。サパティスタ側は抗議したが、法が修正されることはなかった。これ以後、サパティスタは政府との接触を一切停止することになり、現在に至っている。

後述するように、2003年に自治区の再編成が行われた。その動きを政府は警戒したようである。フォックス大統領が軍幹部を招集し、軍事攻撃を行うかどうか検討していたと、当時チアパス州知事だったサラサル (Pablo Salazar Mendiguchia) は証言している [Cervantes 2013: 30]。内務大臣や軍部は強硬に軍事作戦の展開を主張したが、サラサルはサパティスタには資金がないこと、「善き統治評議会」(2003年に始まった自治区の行政機関) は村の連携を構築するもので、政府に反逆するための動きではないと説得したという。2005年には、サパティスタが政府の攻撃を警戒して緊急事態発令の声明を出している [EZLN 2005-1]。その後政府の関心はむしろ麻薬戦争に移っており、サパティスタとの和平は放置されたままである。

(2) 対市民社会

サパティスタは、NGOとの結びつきが強い運動である。蜂起直後から、国内外のさまざまな支

援組織が、インターネット技術、教育支援、資金援助、オブザーバー活動などを行ってきた。経済基盤もなく、政府軍に対抗するにはあまりにも貧弱な武器しか持たなかった彼らにとって、外部からの支援は重要であった。とはいえ、市民社会との関係は常に一定だったわけではなく、開いたり閉じたりのパターンを繰り返している。

サパティスタと市民社会との関係は、現在までに4つのピークを持っている。①1994年蜂起から政権交代まで、②2001年「大地の色の行進」、③2006年「別のキャンペーン」、④2013年エスクエリタ以降である。

① 1994年蜂起から政権交代まで

1994年から2000年政権交代までは、もっとも支援が集中した時期である。政府との交渉が難航するなか、「低強度戦争」といわれる準軍事組織や政府軍の嫌がらせが続き、メキシコ国民および国際社会の目がチアパス州に注がれた。蜂起3カ月後には、サパティスタの声明文や関連情報を掲載したウェブサイトが米国の大学生によって開設された。このウェブサイトはサパティスタによるウェブサイトが安定的に運営されるようになる2005年末まで、最も正確なアーカイブ保管所として機能した。

1994年8月には、メキシコ革命の英雄がかつて開催した会議にならって、全国民主会議 (Congreso Nacional Democrática: CND) を開催した。1996年8月、5カ所のサパティスタ拠点を使って開催した「人類のため、新自由主義に反対する大陸間会議」には、42カ国から5000人が参加し、民主主義や先住民問題に関する討論が行われた。この会議以降準軍事組織との衝突や政府軍による侵攻を監視するため、ボランティアによる国際オブザーバーが自治区に常駐するようになった。

1997年、サパティスタを支援する市民社会グループとして、サパティスタ民族解放戦線(Frente Zapatista de Liberación Nacional: FZLN)が発足した。これは垂直的な組織ではなく、各地で自主的に活動を行うグループの水平ネットワークである。初期にはサパティスタと市民をつなぐ役割を果たしたが、しだいに自然消滅するグループも多く、2006年、正式に解散が発表されている。また、1999年には、先住民の人権保障と低強度戦争停止の是非を問うインターネットによる国民投票を行っている。

②「大地の色の行進」

2000年に政権交代が行われ、政府との対話の機運が高まると、先住民自治を盛り込んだ憲法改正を訴え、24名の司令官がメキシコ各地を回りながらメキシコシティをめざす「大地の色の行進」を行った。寄付口座が開設され、キャラバン費用は寄付によって賄われた。2001年2月24日、サン・クリストバルを出発した彼らは、約1カ月かけて11の州を回り、70回あまりの集会を行いながら3月にメキシコシティに到着した。3月11日ソカロ広場で行った集会には、100万人の市民が集まった。3月28日にはエステル司令官(Comandanta Esther)が国会で演説を行い、法改正に向けての機運は頂点に達した。しかし憲法改正は彼らが望んだとおりにはいかず、運動の方向性を見直す転換点となった。

③「別のキャンペーン」

大地の色の行進の挫折の後、自治区の再編に活動の中心を移したサパティスタが、再び市民社会に向けた呼びかけを行ったのは、2005年である。6月に運動の指針を示す文書を7年ぶりに発表し、これまでの運動の経緯と現状、今後の方針

を明らかにした。「第六ラカンドン密林宣言」と題された6部からなる文書のなかで、新自由主義によってバラバラにされつつあるメキシコを変えるには、既存の政党政治に頼ることはできないとし、現在の政治権力とは別の空間で、別の政治のあり方を模索する必要性を訴えた。この宣言に基づき、大統領選挙に合わせて「別のキャンペーン」を展開することを発表した。1月に代表団がチアパス州を出発し、北部へ向けてバスで移動しながら各地で先住民運動や環境保護運動、農民運動などさまざまな団体と集会を重ね、メキシコにおける民主主義のあり方について討論を行った。26の州で379の集会が行われた後、2006年5月にメキシコ州で起きたアテンコ事件(新空港建設用地収用に端を発する、住民の抵抗運動に対する州政府の弾圧事件)に抗議して中断されることになった。このキャンペーンの重要な点は、政党政治そのものを否定し、いかなる政党も支持しないことが強調されたことにある。7月に行われた大統領選挙では、左派政党である民主革命党(Partido de la Revolución Democrática: PRD)のオブラドル候補(Andrés Manuel López Obrador)が国民行動党のカルデロン候補(Felipe Calderón)に僅差で敗れており、「別のキャンペーン」が左翼運動の分裂を生み出したためであるという批判の声も上がった。

2006年以降、「サパティスタと世界の人々との出会い」(2006、2007年)、「尊厳ある怒り」(2009年)などの集会を行った以外は、市民社会に向けた発言がほとんどないまま数年が経過した。その間、運動は停滞しているとみなされ、マルコス副司令官の死亡説も流れたが、2012年12月21日、2万人のサパティスタが無言でサンクリストバルを行進する「沈黙の行進」を行い、運動が続いていることを示した。12月に発表した文書では「国内外の『第六ラカンドン密林宣言』賛同者との連携

を再開する」として、市民社会とのつながりを再び強化することを発表した。

④エスクエリタ以降

2013年8月には「エスクエリタ」という催しを行った。スペイン語で「小さな学校」を意味するこの催しは、希望者を学生としてサパティスタの村に受け入れ、村の生活を教えようという試みである。1週間の行程で参加費用は交通費、食事代すべて含めて380ペソ（約3000円）であった。第1回目は募集があつという間に埋まったため、2013年12月、2014年1月と計3回開かれている。3回の開催で5500人が村に滞在したことになる。すべての学生に先生役がつけられ、受け入れる人々にとっても、大変な催しだったことだろう。2015年に第二レベルの「エスクエリタ」を開催することを発表した。経済・治安状況からインターネット配信のビデオによる講義となった。2016年には3つの国際集会をする予定である。

(3) 支持基盤内部

①サパティスタ民族解放軍の構成

サパティスタ民族解放軍の構成は、正規軍、民兵、支持基盤からなっている。正規軍は司令官、少佐など軍の位を持ち、いわば「専従サパティスタ」ということになっている。民兵は、自分の村に住みながら必要に応じて武器をとる存在である。正規軍を組織したのは、ゲリラではなくジュネーブ条約にのっとって政府と対等な立場で戦争を宣言するためだったとされる。1994年蜂起以降、一度も戦闘を行っておらず、正規軍、民兵が実際に機能しているかどうかは不明である。2005年の緊急事態宣言の際、「村で社会活動に従事していた隊列メンバーに呼びかけ、全員が配置部署に戻っている」としており、正規軍の人々も

ふだんは各自の村で生活をしているのではないと思われる [EZLN 2005-1]。また、第六ラコンドン宣言で「EZLNは、攻撃のために発砲することを停止するという公約を継続し、政府軍や攻撃的な準軍事組織に対して攻撃を行うことはない」とある。武器をとらないと宣言している以上、その存在意義が自治区内でどの程度認知されているか不明である [EZLN 2005-2]。

支持基盤とは、後方支援を行いながらサパティスタ自治区を形成する村を指す。これらの村を代表する司令官からなる先住民革命地下委員会 (Comité Clandestino Revolucionario Indígena: CCRI) が、全体を統括する最高司令部である。サパティスタのわかりにくさは、この支持基盤のあり方の多様性にある。支持基盤を形成することは村の総意であったとしても、その後の抵抗生活のなかで、運動を抜ける人々が増加している。したがって支持基盤といっても全員がサパティスタであるとは限らず、サパティスタが多数派の村、少数派の村、分裂している村などさまざまな形態がある。村内での両者の関係性も、多様である。完全につきあいを断っているところもあれば、サパティスタを抜けた後、サパティスタが運営するバスの運転手をしている人もいる。村に話を聞きに行けば、聞いた数だけのバリエーションがあるといっても過言ではない。個々の研究者がさまざまな村に入り聞き取りを行っているが、それをまとめ上げて全体を俯瞰する研究はまだなされていない。ここでは、自治区の形成の過程を整理しておきたい。

②自治区の形成

1994年1月蜂起以降、チアパス州は混乱に陥った。サパティスタもしくは非サパティスタ農民組織による土地占拠運動、行政区役場占拠が相次

いだ。ビジャフエルテの調査によると、1994年から1997年までに14万7970ヘクタールの土地が占拠されている[Villafuerte 1999, 134]。政府はこれに対し、非サパティスタ系組織に全国連帯計画(PRONASOL)による資金援助の増額、占拠された農場主には政府が補償金を支払うことで一時的な解決に至った⁽⁴⁾。一方、サパティスタは1994年12月に自治区の宣言を行い、政府支援を受け入れない方針を明らかにした。いくつかの村が集まって自治区を形成し、それぞれが5つの拠点(アグアスカリエンテスと呼ばれる)に所属するとした。1994年の時点で31の自治区が形成された。自治区への参加は、サパティスタ派につらなるという意思表示のようなものであった。土地占拠によって農地を得た後、自治区から脱退する村や、サパティスタへの支援が届かない辺境にいたため脱退する村など、内部は流動的であった。

自治区に関して大きな改革が行われたのは、2003年である。2001年の憲法改正の挫折以降、動向がわからなくなっていたが、2003年7月25日から30日にかけて「チアパス:13分の1の石碑」と題する7部からなる声明文が発表された[EZLN 2003]。そのなかで、サパティスタ自治区を再編成し、5つの「善き統治評議会」に統合し直すことが明らかにされた。5つの拠点の場所は従来と同じであるが、アグアスカリエンテスからカラコルへ改名することで、外部からの訪問者の受け入れ窓口ではなく、自治区の村との連携拠点として位置づけることになった。①村落、②自治区、③善き統治評議会、という3つのレベルの統治機関が併存し、水平的な関係性を作ることがめざされた。カラコルに再編された自治区は2003年の時点で29あり、1994年と同じものは22カ所である。

自治区を再編した理由は3つある。第一に、村

落間の不平等による不満が高まったことである。後述するように、サパティスタは経済的に支援依存型の運動である。従来の支援についての取り決めは、政府支援を拒否するということのみであり、対象が自治区であれ特定の村であれ、基本的にはすべて受け取ってきた。その結果、アクセスがよく有名な村に支援が集中し、周縁の孤立した村は、同じ支持基盤でありながら支援の存在すら知らずに放置されることになったのである[Zapatistas 2013a, 8]。自治区再編によって、NGOからの支援をカラコルが一括して受け取り、必要に応じて村に分配する仕組みを作り、こうした不満の解消に努めることになった。

第二に、交渉相手としての政府に対する不満である。憲法改正や交渉がうまくいかないのは、現行の政党政治のあり方そのものに原因があるとし、政府とは別の政治空間を作る試みとして「善き統治評議会」が作られた。そこでは政治家という職業は必要ないという理念から、評議会への参加を輪番制とした。

第三に、自治の実践において、サパティスタ「軍」部門と支持基盤を切り離すことである。2005年に発表された第六ラondon宣言によれば「(これまで)政治-軍事部門であるサパティスタ民族解放軍(EZLN)がいわゆる『文民』部門の民主政治に介入してきた。EZLNの政治-軍事部門は軍である以上、民主的な存在ではあり得ない。上部に軍がいて下部に民主主義があるのはよいことではない」と説明されている。これまで、支持基盤は軍の意思決定機関に従うものとされており、支持基盤同士の連携機関が存在していなかった。自治の実践を各地域に任せるやり方を模索した結果作られたのが、「善き統治評議会」である。各自治区の代表が輪番制でカラコルの運営を行うことになった。

③自治区の再編

自治区の再編後、各カラコルでさまざまな取り組みが始められた。とくに力を入れたのが、教育、保健衛生の平準化である。教育においては公教育を排除し、各村1校を目標に自治学校の建設が進められた。独自の教育プログラムを開発し、各村で選出されたプロモーターが一定期間研修を受けて、村で教育を行っている。現在自治学校（初等教育）で教えられているのは、算数、歴史、生活と環境、言語（スペイン語）、総合の5分野である。公教育と異なり、スペイン語を第二言語として位置づけ、それぞれの村の言葉で授業が行われている。また机上の学問ではなく、薬草や伝統的な農法の知識を取り入れることをめざし、いわゆるテストや通知表などの評価も廃止した。バロネの調査によれば2008年の時点で510の学校が建設されており、教員1300名、生徒数1万6100名であるという[Baronnet 2012, 22]。

保健衛生についても同様の取り組みが進められ、現在各カラコルに自治病院施設があるほか、小規模診療所や保健所などが作られている。医師については、NGOを通じて定期的に滞在する医師がいるようである。保健衛生面で、保健プロモーターや伝統医療プロモーターを養成しているが、いわゆる医師免許を取得して診療を行うサパティスタがいるかどうかは不明である。筆者が聞き取ったかぎりでは、サパティスタであっても大きな病気をしたら、公立病院か州都の大病院で診てもらうとのことだった⁽⁵⁾。

経済面では、それぞれに持続可能なプロジェクトを模索中である。エスクエリタで配布された教科書から経済活動をみていくと、つぎのようなものがある（以下Zapatistas 2013aおよび2013bより）。たとえばカラコルⅠは倉庫を用意し、流通の活性化によって利益を上げるよう努めている。



ラ・レアリダー村で20周年記念式典（筆者撮影）。

カラコルⅡでは、8カ所のエコロジー農業推進センターを建設し、278名のプロモーターを養成した。また「尊厳を求める女性たち」という民芸品組合、「ヤシル・ショホバル」という共同組合を運営している。コーヒー組合も設立したが、運営管理と指導部に問題があり、失敗した。カラコルⅢでは、牧畜業の推進に力を入れている。家畜が病気になることへの対処法や飼い方の研修を行っており、集団経営の牧畜業が育ちつつあるという。サン・マヌエル自治区が成功例で、30頭で始めた家畜が120頭になったと報告している。またフランシスコ・ゴメス自治区では、スマリエルコーヒー組合が設立され、2008年には2000キロの収穫を上げた。カラコルⅣではトウモロコシ、フリホル豆、コーヒー農園の集団経営を行っているほか、女性たちがパン製造、養鶏、野菜、トウモロコシ作りを共同で行っている。また、2カ所の温泉施設も経営している。カラコルⅤではコーヒー組合を設立し、海外にも輸出している。また、2008年以降、マイクロクレジット銀行が設立されている。

2016年2月23日付「そしてサパティスタ村落では？」と題された声明文では、集団・個人ともに

農業生産が増大し、協同組合の運営も順調であると報告されている。しかし、これらの経済活動がどれほどの利益を上げているのか、実態は不明である。「善き統治評議会」についての唯一の収支報告は、2003年のコミュニケで出されたものである。表1にある通り、自治区の活動によって集められた銀行の資本金と比べると、収入が非常に大きいことがわかる。先述のエスクエリタ教科書にも、NGOによる「連帯支援」を受けていることが記されており、収入の多くを支援に頼っていることが推測できる。

2014年5月には、カラコルIであるラ・レアリダーが準軍事組織の襲撃を受け、学校や診療所が破壊される事件が起きた。村人が1名殺害されたが、サパティスタ軍が応戦することはなかった。急きょ支援要請が呼びかけられ、2015年3月までに119万1571ペソ26センタボの寄付が集められている[EZLN: 2015]。

2 サパティスタは誰のもの？

サパティスタとは誰による、誰のための運動なのか？先住民による新しい運動という評価がある一方、先住民を利用した時代遅れの左翼運動と

いう見方もある。ここでは、運動をめぐるどのような批判が行われてきたかを整理したい。

(1) 外部主導説

①先住民は操られている？

最初にサパティスタを批判したのは、農業問題の専門家で、国立先住民庁長官も務めたアルトゥロ・ワルマン (Arturo Warman) である。ラ・ホルナダ紙に「今日のチアパス」と題した論考を寄稿し、チアパス州で起きた武装蜂起を痛烈に批判した (*La Jornada*, 16 de enero, 1994)。彼の論旨は明快である。彼によれば、サパティスタはチアパス州の先住民によって生み出されたものではなく、彼らを操作する外部の人間によるものである。先住民性や貧困状況は、外部の人間の政治目的のために利用されたに過ぎない。ラカンドン密林地域は、国境に近く孤立しているという理由から戦略的に選ばれたのであり、貧困状況を利用して人々をリクルートしたのである。結論として彼は「(サパティスタ民族解放軍は)先住民運動ではなく、先住民のあいだに植えつけられた政治・軍事計画である。しかし先住民を代表しているわけではない」としている。この外部主導説は、そのまま政府見解としてたびたび利用された。

表1 善き統治評議会収支報告 (2003年8月～2004年8月) および銀行

善き統治評議会	収入 (ペソ)	支出 (ペソ)	銀行 (資本金・ペソ)
I ラ・レアリダー	5,000,000	4,000,000	サパティスタ自治銀行 (90,000) サパティスタ女性権限自治銀行 (10,000)
II オベンティク	4,500,000	3,500,000	
III ラ・ガルチャ	600,000	300,000	サパティスタ自治銀行 (150,000)
IV モレリア	1,050,000	900,000	サパティスタ自治銀行 (146,000)
V ロベルト・バリ奥斯	1,600,000	1,000,000	

(出所) 2004年8月22日付コミュニケおよび Zapatistas 2013a より作成。

歴史学者のクラウゼは、サパティスタ兵士でオシュチュク村で捕虜となったホセ・ペレス・メンデスという24歳の先住民男性の例を紹介しながら、同軍がいかに関教条主義的なゲリラであるかを批判した[Krauze 1994]。彼によれば、ホセ・ペレス・メンデスの口から語られるのは、中米の典型的なゲリラの古びた言説と同じである。チアパス州の先住民はたしかに貧困状況に置かれていたかもしれない。しかし、彼らは選択肢のすべてを奪われていたわけではなく、民主主義のために命を差し出すというのは、彼らの文化にそぐわない。おそらく解放の神学のカテキスタによって教えられたのだろうが、しかしカテキスタたちにそうした思想を吹き込んだのは、キリスト教というより毛沢東主義にかぶれた都市出身の大学生たちである。クラウゼは先住民は運動の主役ではなく、道具となっていると結論づける。彼が1999年に創刊した雑誌「レトラス・リブレス」には、ビケイラなどサパティスタに批判的な研究者やジャーナリストが論考を寄せ(Vigueira 2001)、サパティスタ批判の中心的役割を果たした。

先住民を扇動した「外部からやってきた都市知識人」がいるとするならば、それは一体誰なのかという疑問に答えようとしたのが、テジョ[Tello 1995]である。19世紀後半から20世紀にかけて大統領を務めたボルフィリオ・ディアスの玄孫であり、政治家を父に持つ彼は、コネクションを駆使して、サパティスタ民族解放軍がどのようにして形成されたかを描き出した。彼によれば、同軍の前身は、1969年にモンテレイで結成された民族解放軍(Fuerzas de Liberación Nacional: FLN)にある。彼らは革命によって社会主義をめざす若者のグループであり、その活動拠点の一つとして選んだのがラカンドン密林地帯であった。1970年代初頭に、ラカンドン密林地帯に農園を購入し

先住民との接触を試みたが、1974年に警察に襲撃され、いったん計画がとん挫する。その後、再び密林地帯に拠点を作り、土地をめぐる農園主や政府に反発を募らせていた先住民と結びついて、1983年、サパティスタ民族解放軍を結成した。彼らの目的は、「武装闘争によって国民を開放し、プロレタリア独裁を樹立する」ことである。しかしながら、その目的やFLNとの関係は巧妙に隠され、代わりに掲げられたのが「我々は500年におよぶ闘いから生まれた」というフレーズに象徴される先住民という看板なのである。彼の主張はクラウゼらと同様、サパティスタは先住民によって構想された運動ではなく、反民主主義・伝統的なゲリラによって操られたものであるというものである⁽⁶⁾。

サパティスタ民族解放軍の成立に関しては、テジョの説はほぼ定説となっている。前身に民族解放軍(FLN)があったことはマルコス自身認めており、政治軍事組織(FLN)・政治的先住民(エヒード組合等運動)・政治意識を高めつつあった先住民民衆(後の支持基盤)の出会いが、サパティスタ民族解放軍を構成したと語っている。ただし、マルコスの説明によれば、武装蜂起の最終決定を行ったのは先住民村落の人々であり、1993年に民族解放軍(FLN)は指揮権を失ったことになっている[マルコス/ル・ボ 2005, 79-80]。

②マルコス副司令官への批判

運動の進展とともに、活動が先住民によって担われていることや、現在は民族解放軍(FLN)との結びつきがみられないことが明らかになってくると、「外部説」による批判の矛先はマルコス副司令官に向けられた。ギジェルモプリエト(Alma Guillermoprieto)は、テジョらの著作に依拠しながら、サパティスタが白人によって率いられた運

動であるという主張を繰り返した。マルコスは先住民の司令官たちを引き連れながら、事実上唯一のスポークスマンであり、彼がいなくなれば運動の主張を語れる人はいなくなるだろうとしている [Guillermoprieto 2001]。ビケイラは、2001年チアパス州選挙で制度的革命党 (PRI) が圧勝したことを受けて、サパティスタに対する幻滅感が広がっていると分析した [Viqueira 2001]。彼によれば、その責任はマルコスにある。彼は首都行進でメキシコシティに来たにもかかわらず、議員と議論もせず、何の成果も生み出せなかった。つまるところ彼は、チアパスの問題を解決するよりも、ゲリラ詩人という自分のイメージを保つ方が大切なのである。彼を信頼していた先住民たちはいまや混乱し、方向性を見失っている。司令部は戦略を立てることができず、支持基盤 (ますます孤立し、減少している) は、置かれた状況に応じてバラバラに行動しているのである。ピッチャードは、マルコスの言説が、先住民文化を他のメキシコ人よりも優れた倫理に基づくものという前提に立っていると指摘する [Pitchard 2001]。彼によれば、メキシコ内外の知識人は、ステレオタイプの先住民性を根拠に、ゲリラの要求や行動を美化し、近代化によって否定された「真のメキシコ人の姿」をそこに投影してしまっているのである。

(2) サパティスタ「軍」と支持基盤

①「戦略的な忠誠」

サパティスタ運動の本質を「国民解放」をめざす左翼運動と、貧困状況から抜け出したい先住民の綱引きにあるととらえているのが、エストラダである。彼によれば、サパティスタ軍の最高司令部として先住民からなる「革命地下委員会」があるというのは、完全なフィクションである (以下 Estrada 2007 より)。中産階級出身で大学教育を

受けたマルコスは、文化資本、社会関係資本ともに優れており、サパティスタ民族解放軍の象徴となっている。一方、同組織は溪谷部に浸透する際、組織運営を行える人材を十分に育成することができなかった。その結果、内部の民主主義は確立しておらず、マルコスを頂点とする軍部による権威主義的な体制が続いているという。経済的にも成果を上げることができていない。自治区では生産の自主管理をめざしたが、それを支える経済資源が不足しており、新しいモデルを構築することができなかった。支持基盤の村の生活は、改善するどころか、公的支援の恩恵を受けた反サパティスタの村に比べ悪化している。そのうえ市民社会からの支援が平等に行きわたらず、村落間のあつれきを生み出している。その結果、サパティスタを抜ける村もあり、自治区内ではサパティスタと反サパティスタが、交流することもなく、互いを無視しながらそれぞれの生活を営んでいる。また、村のなかで反サパティスタが少数派であれば、村八分になることもある。

サパティスタの目的は、あくまで「国家と資本による支配」から「搾取された人々」を「解放」することである。すぐにそれを実現することができないために、その布石として始められたのが善き統治評議会である。これは先住民の自治意識の成熟の成果ではなく、中米ゲリラにならって解放区に革命政府を樹立する動きであり、1980年代からの計画に沿ったものである。「善き統治評議会」は、村の不均衡を改善するための改革ということになっているが、行政・立法・司法の分権がなく、権力の一極集中を肯定している。輪番制による統治は非効率であるうえ、運営のための経済資源がない。支持基盤に我慢を強いるばかりで満足な結果を出すことができず、結局軍部の台頭を招くことになるだろうとしている。

彼の見方は、運動の本質を外部からの思想にあるとしている点で、ワルマンらの従来の主張と同じである。異なる点があるとすれば、マルコスを中心とする左翼思想家が先住民を利用しようとしたのと同様に、先住民の側も彼らを利用しているとみていることである。彼によれば、支持基盤は、ゲリラたちがかつて約束した恩恵をいつか得られると信じて「戦略的な忠誠」を示しているに過ぎない。彼らは社会的排除から抜け出すために、つかみ取れるチャンスに手を伸ばしたに過ぎない。それが教会であれ政党や左翼運動、ゲリラ、サパティスタ民族解放軍であれ、彼らの主張自体は問題ではなく、具体的にどのような資源や機会、つながりを得られるかのほうが重要だったのである。

レゴレタも同様の見方をしている[Legorreta 2014, 42]。彼女によれば、サパティスタには2つのプロジェクトがある。一つには司令部がめざしている、反システム闘争を通じた社会正義の実現であり、もう一つは生活状況を具体的に改善したい支持基盤の願いである。「従いながら統治する」というスローガンとは裏腹に、司令部は紛争地域のなかに支配構造を作り上げてきた。それは支持基盤の人々を司令部のプロジェクトに従わせるよう訓練し、サパティスタでない人々と衝突させるためである。彼らは社会アクターを「善い者」と「悪い者」に二分し、自分たちに賛同しないと裏切り者というレッテルを貼る。その一方で支持基盤には経済活性化のための具体的方策を打ち出すことができないため、ますます貧困化することになる。

②運動の矛盾

エストラダの指摘には、筆者も賛成する点はある。第一に、経済的な脆弱性である。サパティ

スタは、利潤を生みだせるような経済の仕組みを作り出せていない。サパティスタとしての活動は無償であり、家計は自らで稼ぎ出さなければならない。運動にコミットすればするほど貧困化するという矛盾を抱えているのである。その結果、2000年代に入り、自治区からも多くの男性が米国に出稼ぎに行くことになった⁽⁸⁾。第二に、反サパティスタ派が少数の場合、村で不利益をこうむることもあり得るだろう。集団で耕作する土地の権利は当然奪われる。北部のように、サパティスタ派と反サパティスタ派の村が緊張関係にある地域もある。

また、マルコス副司令官の言動には、不可思議な点もある。2013年2月、モイセス司令官(Comandante Moisés)が副司令官になることが発表された。つまり、マルコスに代わってスポークスマンとして活動するということである。2014年5月25日には、マルコス副司令官が「マルコス」は死んだという趣旨の声明を発表した。準軍事組織によるラ・レアリダー襲撃の際に殺害されたガレアノ(Galeano)の代わりに自らが死んで、ガレアノに改名するというものだった⁽⁷⁾。筆者はそれを本格的な世代交代と解釈した。ところが舌鋒は衰えることなく、ウェブサイト上で精力的に声明を発表し続けている。運動の指針にかかわる声明も、多くはモイセスとガレアノの連名である。いったい何のための改名だったのか謎である。その一方で、ウェブサイト上で森羅万象を語る姿が、権威主義の頂点に君臨しているというエストラダの説の裏付けになるとも思えない。

サパティスタに参加する先住民は、エストラダが描くほど目先の利益を求めて行動する人々なのだろうか。自治区のなかで、いつか与えられるであろう恩恵を待ちながら「戦略的な忠誠」を示しているのだろうか。筆者には、彼らなりの信念

に基づいて決断を行っている主体的な参加者に思える。20年以上にわたり外部の社会に対して閉じたり開いたりを繰り返した村々は、決して視野の狭い閉ざされた世界ではないのである。いわゆる「解放区の革命政府」というイメージでとらえることはできない。

結びにかえて

本稿では、まず第1節で運動の流れを概観し、運動の柔軟性を示した。ついで第2節で批判点をまとめた。そこでみたように、サパティスタ民族解放軍は、蜂起直後は外部に操作された運動であるという説が喧伝された。運動に参加しているのがマルコス副司令官以外は先住民であり、拠点がチアパス州村落にあることが明らかになった現在、それは意味のない議論のようにみえる。しかしながら、現在に至るまで、サパティスタ軍部が支持基盤を操作しているという図式でとらえる論は根強い。軍部とは、マルコスを頂点とする専従軍人のことである。その図式がどの程度正しいのか、軍内部が閉ざされている以上、外から知ることはできない。つまるところ、軍と支持基盤との関係性をどう解釈するかによって、運動に対する見方は180度変わってくるのである。

筆者にとって印象深い村がある。1995年、政府軍による侵攻を受けて、村人が避難生活を余儀なくされたグアダルーペ・テペヤク村だ。6年にわたる避難生活を経て、2001年に村民は帰還を果たした。しかし家や田畑は壊されており、生活再建のため米国へ出稼ぎに出る人が増加した。彼らの多くは帰国後サパティスタをやめることになった。サパティスタであるためには村の職務を果たさなくてはならないが、出稼ぎが長引けばそれを果たすことができない。生活再建にまい進するなかで、サパティスタとしての抵抗生活に

疲れた人が増加したのだという。村には現在、政府支援を受け入れた45家族と、サパティスタ派35家族が暮らしている。村の議会は2つに分裂し、小学校も政府系と自治学校に分かれている。こう書くと相互不信のなかに暮らしているように聞こえるが、そうばかりでもない。サパティスタをやめた人が、サパティスタが運行するマイクロバスの運転手を務めるなど、つき合いは続いているのである。村には、味方／敵、強調／反目といった単純な二項対立では量れない、重層的に絡み合った複雑な関係がある。やめる人がいるというのは、健全なことであると筆者は思う。それぞれが自分に合った選択をできる世界が構築されていくプロセスであってほしいと願っている。

注

- (1) これは政府発表の数値であり、実際にはもっと多いとする説もある。
- (2) 政府発表によれば、マルコスの本名はラファエル・セバスティアン・ギジェン・ピセンテ、1957年タマウリパス州生まれである。彼は蜂起以後残った唯一のメスティソ（非先住民）であり、運動を外部とつなぐスポークスマンである。サパティスタの象徴的存在であり、それゆえサパティスタをマルコスの運動とする見方もある。
- (3) 形骸化とはサン・アンドレス合意をふまえていないとするサパティスタの見解であり、先住民の権利保障に貢献したという見方もある。詳しくは米村[2015]を参照。
- (4) 全国連帯計画とは、サリナス政権下で始められた包括的な貧困対策・地域開発プロジェクトであり、福祉、生産、地域開発の3つの部門からなっていた。
- (5) とはいえ保健プロモーターは現地で非常に信頼を得ている。筆者が2013年エスクエリタ参加のため村落間を移動するトラックに乗った際、あまりの悪路に気を失ったり嘔吐する女性が後を絶たなかった。そのたびに保健プロモーターが呼ばれ介抱にあたっていた。エスクエリタ参加者には医師もいたが、一顧だにされない様子が印象的だった。

- (6) 同様の主張を行っている著作にDe la Grange et.al. [1997] Legorreta [1998] がある。
- (7) ガレアノ (本名: José Luis SolísLópez) は, 1994年武装蜂起に参加し, ラ・レアリダーのサパティスタ自治学校教員だった人物である。ラ・レアリダーは2014年3月から水の供給をめぐる反サパティスタ系農民組織 (CIOAC歴史派) と対立していた。事態がこじれて5月2日準軍事組織の襲撃を受けた際, 銃弾を受けて死亡した。
- (8) 米国への出稼ぎについては柴田 [2014] を参照。

参考文献

<日本語文献>

- 柴田修子 2014. 「チアパスのサパティスタ運動—自治区におけるコミュニティ創造の実践」石黒馨・初谷譲次編『創造するコミュニティー—ラテンアメリカの社会関係資本』晃洋書房
- マルコス／イボン・ル・ボ 2005. 『サパティスタの夢—たくさんの世界から成る世界を求めて』佐々木真一訳 現代企画室。
- 米村明夫 2015. 「国際法, メキシコ憲法に見る先住民の権利の発展」『ラテンアメリカレポート』第32巻第2号。

<外国語文献>

- Baronnet, Bruno 2012. *Autonomía y educación indígena: las escuelas de la Selva Lacandona de Chiapas*. México, Quito: Ediciones Abya-Yala.
- Cervantes, Jesusa 2013. “Pablo Salazar Mendiguchía: El zapatismo redefinió sus campos de acción.” *Proceso edición especial* 43: 29-31.
- De la Grange, Bertrand y Rico, m 1997. *Marcos, la genial impostura*. México: Aguilar.
- Estrada Saavedra, Marco 2007. *La comunidad armada rebelde y el EZLN*. México: El Colegio de México.
- 2010. “Consideraciones finales: zapatismos locales.” en Estrada y Viqueira coord. *Los indígenas de Chiapas y la rebelión zapatista, microhistorias políticas*. México: El Colegio de México.

- EZLN 2003 Chiapas: la treceava estela. (www.enlacezapatista.ezln.org.mx <http://www.enlacezapatista.ezln.org.mx>)
- 2005-1 Alerta roja general. (www.enlacezapatista.ezln.org.mx <http://www.enlacezapatista.ezln.org.mx>)
- 2005-2 Sexta declaracion de la Selva Lacandona. (www.enlacezapatista.ezln.org.mx <http://www.enlacezapatista.ezln.org.mx>)
- 2015 Gracias. (www.enlacezapatista.ezln.org.mx <http://www.enlacezapatista.ezln.org.mx>)
- Gil Olmos, José 2013. “Manuel Camacho Solís: No era una guerrilla tradicional.” *Proceso edición especial* 43: 8-13.
- Guillermoprieto, Alma 2001. “Historia de un rostro” *Letras Libres* 27: 40-48.
- Krauze, Enrique 1994. “Procurando entender.” *Vuelta (seplemento extraordinario febrero de 1994)*: J-L.
- Legorreta Díaz, Maria del Carmen 1998. *Religión, política y guerrilla en Las Cañadas de la Selva Lacandona*. México: Cal y Arena.
- 2014. “Las lecciones.” *Proceso ed. especial* 43: 42-47.
- Pitchard, Pedro 2001. “Los zapatistas y la política.” *Letras Libres* 34: 50-54.
- Tello Díaz, Carlos 1995. *La rebelión de las Cañadas*. México: Cal y Arena.
- Viqueira, Juan Pedro 2001. “Chiapas: más allá del EZLN.” *Letras Libres* 36: 29-34.
- Villafuerte Solís, Daniel, et.al. 1999. *La tierra en Chiapas: viejos problemas nuevos*. México: Universidad de Ciencias y Artes del estado de Chiapas.
- Zapatistas 2013a. *Gobierno autónomo I. cuaderno de texto de primer grado del curso de “La libertad según las Zapatistas”*.
- 2013b. *Gobierno autónomo II. cuaderno de texto de primer grado del curso de “La libertad según las Zapatistas”*.

(しばた・のぶこ／同志社大学嘱託講師)